



ミスト出身のドライバーには海外で活躍するドライバーや、国内のカテゴリーで期待される有望な若手たちが多くいる。近年で言えば、現在F2で活躍している牧野任祐、全日本F3に参戦中の大湯都史樹、FIA-F4でポイントランキングトップにつけている角田裕毅だ。彼らは全員ミストでクルマの走り方、ドライビングを学んできた。まさに若手ドライバーのステップアップの入り口として機能している証だろう。

2018 FORMULA 4 CHAMPIONSHIP

# JAF F4

Paddock News Vol.3

国内唯一開発競争のある  
ミドルフォーミュラF4の魅力を探る

## 常勝チーム“MYST”のノウハウ 速いクルマはこう造る



S.Sakai

JAF・F4は今や、上位フォーミュラへステップアップを志す若いドライバーにとって登竜門のひとつであるとともに、国内コンストラクターがオリジナルマシンを走らせられる数少ないカテゴリーとなった。これまでスーパーFJ、JAF・F4向けに数々のオリジナルマシンを開発、販売してきた自動車工場MYSTの庄司富士夫代表は、フォーミュラ・ルノーのカーボン・シャシー流用が可能になった今シーズンの状況をどのように見ているのだろうか。

「業界としても、クルマを増やさないというドライバーの協力も受けられなくなってきた。参加者負担が重くなる可能性はある。だから台数を増やそうという考え方はわかる。ルノーが出てくるのは基本的には悪いことではないよ」

かつてJAF・F4は、価格の問題を中心にカーボンがアルミかをめぐって論争が起きたことがある。庄司はあえて言うならば「アルミ派」であった。その庄司が今なぜカーボン・モノコック参入を受け入れるのか。

「我々もカーボンシャシーを作った。たしかに強度をもったまま軽量化できる素材です。でも、200km/h出るか出ないかで最低車重570kgもあるようなJAF・F4は、どんな材料で作っても強度は充分持たせられる。アルミのほうが、さも危ないというような言い方がされるけど、30年前の作り方は違ってさまざまな箇所が進化しているから昔と同じレベルで比較されたら困るんだよ」

F1グランプリカーのように徹底し

た軽量化を追求するならば軽くて強度の高いカーボンはアルミよりはるかに好ましい素材だ。しかし「重くてもよい」レーシングカーでは、アルミはカーボンに劣る素材ではないというのだ。「カーボンは否定しない。でも価格はどうか。カーボンモノコックは頑張って150万円。でもアルミモノコックなら、うちらは80万円で作るよ。しかもカーボンは一旦衝撃がかかったらどうなるかわからないけど、金属は変形しても強度が落ちない。変形したままアームを交換しても、よほどでない限り性能は落ちないんだ。底辺レースってそういうものじゃないのかな？」

庄司はJAF・F4、スーパーFJを敢えて「底辺レース」と呼ぶ。若いドライバーがそこから入門してステップアップしていく、その入り口になるべきカテゴリーだと考えているからだ。「JAF・F4の価格はモノコック80万、エンジン220万で300万。ミッションつけて400万、カウル類をつけて500万。ここまででしょう」

500万円の価格には根拠がある。JAF・F4はスーパーFJでフォーミュラカーレースに入門した選手がステップアップし、さらに上位カテゴリーへと進めるために機能しなければならぬカテゴリーだと庄司は位置づけているからだ。

「若い子がスーパーFJで使えるのは300万までだよ。そこで頑張ってチャンピオン取ったとする。そうしたらチャンピオンカーだといって250万で売る。そこに250万追加すればJ

AF・F4の新車に乗れる。それがステップアップの道ですよ。いきなり700万、800万とかいうクルマは、普通の若い子には無理ですよ」

庄司が価格にこだわるのは若いドライバーのためだけではない。今、国内モータースポーツ界が直面している大問題「モノ作り力の低下」に歯止めをかけるきっかけになると信じているからだ。

「協会認定のサバイバルシェルを何社かに作ってもらうとともに、既存の中古カーボンモノコックでも協会認定で売買価格が80万円以下なら使ってもいいということにすればいい。そのうえで、協会が価格明記でエンジンやミッションや足回りやその他必要なコンポーネントのメニュー本みたいなものを出せばいい。完成車も買えるけど、こういう部品を組み合わせて、そのときには値段はこうなりますよ、と」

庄司が今季、F・ルノーのモノコックがJAF認定モノコックになったことについて肯定的に受け入れている理由がここにある。

「そういう価格の安いものがあれば、じゃあこれとこれを買って2、3台組み立てようという人も出てきやすくなるんじゃないかな。最初は、モノ作りの基本になるものを提供して、それで作っているうちにみんなおもしろくなつてもっと作り始める。ハンマー（伊澤）のようなのはいいんじゃない？自分のクルマを作ってくる情熱がすごいよ。ああいう人がいっぱい出れば台数も増えるんだろう。それがベストの流れだと思っただ」

「モノ作り力の低下」の歯止めになると信じている



F4東西シリーズは  
ダンロップタイヤの  
ワンメイクレースです



RACE RESULT

<p>WEST SERIES Round 4 8月16日 岡山国際サーキット</p>	<p>EAST SERIES Round 5 8月19日 岡山国際サーキット</p>
--	--